

学位請求論文審査要旨

報告番号 甲 第 号

氏名 伊藤敦広

論文題目 陶冶と教養のプリズム ヴィルヘルム・フォン・フンボルトにおける陶冶論の生成と展開

審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員

教育学修士 眞壁宏幹

副査 慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員

教育学修士 松浦良充

副査 お茶の水大学文教育学部教授・大学院人間文化創成科学研究科教授

教育学博士 池田全之

I 本論文の概要

本論文は、19世紀初頭、ナポレオンに敗北したプロイセン王国が行った改革のうち教育分野の改革を引き受けた官僚ヴィルヘルム・フォン・フンボルト（1767-1835）の文教政策（単線系学校制度を目指したプロイセン初等・中等教育改革、研究型の近代大学を志向したベルリン大学の設立、ベルリン初の近代ミュージアムであるアルテス・ムゼウムの設立など）を支えた陶冶論=人間形成論（Bildungslehre, Bildungstheorie）の成立と展開を、プロイセン・アカデミー版全集のみならず、批判版書簡集、日記などを対象とすることで解明したものである。従来のフンボルト研究は、初期の自由主義的国家観（『国家活動の限界を決定するための試論』）と陶冶・教育観との関係を問うものや、プロイセン教育改革に関する構想案（「ケーニヒスベルク学校計画」「リトアニア学校計画」や「ベルリン高等学問施設構想案」など）に関するものが多かった。また、フンボルトが官僚引退後、集中的に取り組むことになる言語研究（『カヴィ語研究序説』）に関するものに集中していた。しかし、文人官僚としての研究や活動の根底にあった陶冶思想については、限定的に言及されるにとどまり、その生成と展開を一貫して追求する研究はまだ存在していなかった。

本論文は、フンボルト研究に求められてきたこの課題に応えるため、これまでの研究蓄積を踏まえた上で、従来あまり言及されてこなかった、自然界における性と生命の発生問題を論じた自然哲学関係の草稿や、親しい友人だったシラーやゲーテとの交流から生まれた、芸術創造の問題を扱った美学関係草稿、そして「人間性（フマニテート）の象徴」としての古代ギリシア文化に関する古代論草稿、さらにはヤコービやシラーなど当時の知識人たちとの書簡や日記を考察することで、ベルリン啓蒙主義の環境にあった初期フンボルトがいかにして啓蒙主義から離脱し、「他なるもの」との出会いの中で個性や人間性の涵養を目指す「新人文主義」へと至ったのか、その経緯を明らかにしようとしたものである。

II 本論文の構成

序 論 陶冶・教養の象徴としてのフンボルト

- 第一節 ドイツ的陶冶・教養の一般的特徴
- 第二節 教育学研究におけるフンボルト
- 第三節 目的・手法・構成

第I部 新たなものの産出：陶冶論の生成

第一章 光と暖かみ：陶冶の問題圏の創出

- 第一節 ベルリンの遺産相続者
- 第二節 感性の擁護
- 第三節 立法と教育から自己陶冶へ

第二章 人間の産出と形成：陶冶論を基礎づける性の自然哲学

- 第一節 「人間陶冶の理論」によるフンボルト陶冶論の先行把握
- 第二節 性の差異および新たなものの産出と形成
- 第三節 フンボルト陶冶論における自然哲学の機能

第II部 人間精神の形成：陶冶論の展開

第三章 他者に顕現する理想：目的論的学問としての人間学と陶冶論

- 第一節 初期フンボルトにおける実践哲学的関心と学問の区分
- 第二節 カント的学問体系と「人間性の精神」
- 第三節 比較人間学の方法
- 第四節 比較人間学の展開

第四章 構想力の所産としての現実：美学論の陶冶論的位置

- 第一節 『美学試論』を貫く関心と主要問題
- 第二節 構想力の規定
- 第三節 美的作用の構図

第五章 古代ギリシアという象徴：教養理想を問う古代論

- 第一節 「形式的陶冶」の含意
- 第二節 「ギリシア精神」の思想的背景
- 第三節 教養の不可避的錯覚

第六章 陶冶論の行方：学問論から人間性の理念へ

- 第一節 ベルリン大学構想における陶冶・教養の理念
- 第二節 「自伝断片」から人間性の理念へ

結 論 フンボルトというプリズム

第一節 要約と結論

第二節 残された課題

初出一覧

文献一覧

謝辞

序論では、本論文がフンボルトの陶冶論を象徴形成、像形成という視座から発展史的に再構成するものであることが述べられる。特に、従来のフンボルト陶冶論解釈では注目されてこなかった「理想」、「像」、「象徴」、「生命」などの重要概念を主題的に取り上げ、それらがいかなる仕方で陶冶や教養の問題圏の内で関連し、機能するかを明らかにすることが予告され、章構成が説明される。

第一章では、初期フンボルトの思想形成過程を、教育としての啓蒙から、自己陶冶としての啓蒙への移行と特徴づけられる。少年期の家庭教師だった哲学者エンゲルを介して「自己活動性」や「多様性」といったライプニッツ・モノドロジーに由来する原理が受容されたこと、ベルリン水曜会から啓蒙主義の基本的信条を学んだことなどが論じられる。特に『ベルリン月報』上でなされたモーゼス・メンデルスゾーンらの「啓蒙」への反省的議論を介して、フンボルトにおける独自の啓蒙理解が形作られたことが論証される。加えて、ベルリン・サロン（ヘンリエッテ・ヘルツのサロン）の体験と「育徳同盟」への加盟、ゲッティンゲン大学での古代研究、宗教勅令という事件やヤコービとの交流を介して、「女性」、「古代」、「宗教」、「信念」をめぐる独自の考えが醸成され、フンボルトの内に個別具体的人間の感性を擁護する態度が形成されてきたと指摘される。こうしてフンボルトは、かつてのもう一人の家庭教師で啓蒙主義を代表する教育者カンペに代表される、「有用性」を「幸福」と同一視するような汎愛主義的立場から距離を取るようになる。「有用性」だけでなく、「美」と「崇高」がもつ人間形成上の意義に着目しつつ、また、各人それぞれに異なる「徳・卓越性」の追求こそが、人間の「幸福」であるべきだとするに至るのである。その結果、多様な諸個人を同じ方向に向かわせる「立法や教育」ではなく、各人の自覚的な自己陶冶により社会を改良するという陶冶論の基盤が形成されることになる。

第二章では、性の自然哲学が検討され、陶冶論の基礎づけの試みと解釈できることが示される。テキストとしては、まず草稿「人間陶冶の理論」が取り上げられ、自我と世界の相互作用、疎外からの回帰、個別具体的人間の性格形成を介した人類＝人間性の陶冶など、「フンボルトの陶冶論」と言われるとき通常イメージされる諸特徴が確認される。しかしながら、自己陶冶を「人間の真の目的」とするにしても、その学問論的根拠は「人間陶冶の理論」のみでは明らかにはならない。そこで、当時の発生学上の問題を考察した性別論を取り上げ、フンボルト思想の根本モチーフとなる後成説的な思考型が取り出されることになる。当時の自然科学上の成果をもとに主張される、「男性的なもの」と「女性的なもの」の婚姻による「新たなもの」の産出と形成は、永遠に繰り返される自然の運動の目的とされることで、他者の内に自己に欠けているものを求め自己陶冶に向かう個人の衝動（愛）を基礎づけることになった。フンボルトの自己陶冶の運動は自然全体の運動の中に位置づけられていることが示される。また、この考察から、ライプニッツ＝

ヴォルフ哲学のみに基づくフンボルト解釈が批判されるとともに、性別論の陶冶論的意義が主張され、フンボルト陶冶論が、明確に、偶然的なものの意義を認めない決定論に通じる前成說的陶冶概念から離反し、個別具体的なものや多様性に独自の価値を認める陶冶論に移行したことが指摘される。

第三章では、初期フンボルトの学問論が取り上げられる。フンボルトは当初、家庭教師エンゲルの哲学講義を介して、人間の心身が厳密に区分され、両者の「調和」はあっても「相互作用」はないとするライプニッツ＝ヴォルフ学派の哲学体系を学んだが、「全体としての人間」を考察の対象に据える一つの学としての「人間学(Anthropologie)」に関心を抱くようになり、ここから存在と当為を同時に問題とする陶冶論を構想し始める。さらに、シラーやケルナーと共同で行なったカント研究を介すことで、存在と当為を同時に扱う人間学は、陶冶論と共に、「理性の理想である完全なものに従って現実の対象を扱う目的論的学問」として位置づけられることが示される。しかし、カント哲学の影響は随所に見られるものの、陶冶・教養に着目するフンボルトはカントとは明確に区別される。この事実をパリ滞在期に書かれた「人間性の精神」を取り上げ、人間の究極目標が、定言命法で実現される道徳的価値の実現のみではなく、「全体としての人間のあらゆる力とあらゆる表現を包括するほど普遍的な何か」の実現とされ、それが「陶冶・教養(Bildung)」と名づけられること、換言すれば、感性的なものによって個別化・多様化した人間独自の価値、すなわち「個別的理想」の実現を重視していたことが明らかにされる。その上で筆者は、フンボルトが構想した比較人間学に着目する。この比較人間学においては、自然誌的認識、歴史的認識、哲学的認識それぞれの価値が認められるとともに、「全体としての人間」を捉えるため、産出的構想力を介したこれら認識の統合が説かれていること、この認識統合によって、個体の存在と当為を同時に示す「本質」、「像(Bild)」、「性格」が形成されるだろうと想定されていることが示される。最後に、この中期フンボルトの比較人間学が、初期の自己陶冶の問題圏から、他者の自己陶冶をいかに促進するかという課題を引き受ける方向に進みきっかけになったことが示される。

第四章では、パリ滞在期に執筆された『美学試論』が考察され、フンボルトにおける構想力概念の特殊性と、陶冶論におけるその意義が解明される。まず、ゲーテの『ヘルマンとドロテア』の批評である『美学試論』が、実はフンボルトの陶冶研究の一部と見なすべきものであることが示される。というのも、フンボルト自身の言にしたがえば、『美学試論』は構想力問題を主題としているが、その背景には「そもそもいかにして芸術家による美的作用が可能なのか」という問題が存在するからである。フンボルトはゲーテの著作の批評に寄せて「人間の美的教育」の可能条件として構想力の問題を考察するのである。次に、フンボルトの構想力概念の規定と、陶冶活動との関係が明らかにされる。フンボルトによれば、芸術一般の課題は「現実のものを像に転化すること」である。芸術家は構想力によって「現実」を無化し、作品というかたちで「理想」的世界(「像」)を作り出す。しかし、この構想力の作用は、芸術創作のみならず、人間が現実を生きる瞬間、すなわちどんな陶冶活動の場面でも働いている。どんな人間も、自分自身、他者、世界全体について構想力を用いてつねに何らかの認識、イメージ、すなわち「像」をもち、それを不断に更新しつつ生きているからである。こうしてフンボルトは、芸術家—作品—鑑賞者という三項関係から美的作用を捉える。鑑賞者・読者はたんに「像」として示された作品を受容するのではない。鑑賞者・読者自身の産出的構想力を用いて「像」を創り直すのである。美的作用とは、いわば作品と鑑賞者のあいだで生まれる根源的創造行為であることが判明する。それはまた、陶冶活動一般にも妥当するプロセスである。

第五章では、初期から中期にかけて執筆されたフンボルトの古代論を取り上げ、古代ギリシア文化が陶冶論的意義をもつに至ったかが検討される。まず、フンボルトも従来指摘されてきた古典語学習の形式陶冶力を否定はしないが、彼にとってむしろ「ギリシア精神」の実質こそが重要だったことが確認される。初期に書かれた「古代論」によれば、陶冶プロセスは一般的に「他なるもの」への「類似化」と規定されるが、フンボルトにおいて、古代ギリシアは単なる「他なるもの」ではない。疎外され、抑圧された近代人への対抗軸という意味をもっており、その意味でフンボルトは、古代ギリシアを「人間性の象徴」と名づける。古代ギリシア人は近代人の内に潜む完全性の象徴になる。しかし、フンボルトは素朴に古代ギリシア人を理想化したのではなかった。この象徴は、個々人の古代ギリシア文化との取り組みの中で個性化された多様な解釈を受け入れる余地があることを認めていたし、「教養の不可避的錯覚」という視点をフンボルトが自覚していたからである。換言すれば、種々の古代論が成立した当時の歴史的思想史的背景を考慮すると、フンボルトにおける古代を介した陶冶が、同時代の国民形成をめぐる議論と密接な関係をもっていたことが判明し、古代を介して各個人がフマニテートへの努力を行い「市民」「国民」として国家を改良することを期待したものだったことがわかってくる。こうした意味で、フンボルトが実体としての古代を理想化していたのではなく、当時の情勢において自身の眼が「不可避的な錯覚」に陥っていることを強く自覚しつつ、多様な古代ギリシア像を各個人が自分の内に形成することを期待していたのである。こうしてフンボルトの陶冶論における古代問題は文化形成・国民形成の問題にも接続することが結論される。

第六章では、教育改革期における陶冶論の応用と、後期言語研究における陶冶論の行方を探っている。初期フンボルトはあくまでも自己陶冶を自らの課題とし陶冶論を組み上げた。しかしパリ滞在期すなわち中期以降になると、次第に自己陶冶への関心を示さなくなり、代わりに、他者をいかにして陶冶に導くかという問題が現れてくる。フンボルトが教育制度改革に携わったのはあくまで偶然的な理由からだったが、ベルリン大学創設期の「覚書」や関連テキストにフンボルト陶冶論の「応用」が見られることが確認される。近代大学の「フンボルト理念」（これは100年後シュブランガーに遡るもので、フンボルト自身に帰されるものではないが）の一原則に「研究と教授の一致」がある。これは、大学にはもはや教育を必要としない自立的・自律的な学習者が集まり、自己陶冶に専心する場であることを意味する。また、フンボルトの学問理解によれば、学問はそれ自体を目的とするものではなく、あくまで個人の自己陶冶の素材であるとされていることが確認される。「真の学問」は現実の諸個人という「鏡」に映ってはじめて予感されるもので、現実の個人を離れば学問は単なる「死文字」にすぎず、研究活動に従事する諸個人が、自らのエネルギーによって死せる学問を生きた学問に変え、学問に命を吹き込むことが求められるのである。学問と学ぶ者、あるいは問いと答えの対話の中で、幸福な「婚姻」がなされ、「新たなもの」、「生命」が生まれる。ベルリン大学の構想でも登場する自然哲学的隠喩を見ても、初期フンボルトの陶冶論の線上に位置づけられることがわかる。さらに、教育改革以後もフンボルトが自らの陶冶論の立場を堅持していたことが、「自伝断片」と後期フンボルトにおける歴史論と言語論を取り上げ説明されている。フンボルトが自らの言語研究で展開した歴史の理念は、初期以来、彼を導いてきた「人間性の理念」である。フンボルトは多様な言語を研究することによって、「人間性」にその内実を与えようとしてきたが、その研究自体が自己陶冶への取り組みであり、人類が完成に近づいていくことでもあった。学問研究によって個人レベルでも人類レベルでも多様性を保持しながら形成（陶冶）されていくことを主張するフンボルトの陶冶論は、啓蒙

の理念を、自らが学んだ啓蒙主義とは違う仕方を実現したものだたとされる。

結論では、これまでの考察の総括と、今後の課題が提示される。課題としては、古典主義建築家フリードリヒ・シンケルとともに実現したベルリン最初のミュージアム「アルテス・ムゼウム」（古代ギリシア美術の専門美術館）の社会教育的意味の解明と、政治活動を引退した後に集中的に行われることになる言語研究がもつ陶冶論的含意を丁寧に跡付ける必要性が指摘された。

III 本論文の評価

本論文の意義は、これまでのドイツ・日本におけるフンボルト研究を踏まえ、全集のみならず、書簡や日記を対象にすることで、フンボルト陶冶論の思想形成過程を明らかにし、新しい全体的フンボルト像、特にその陶冶論の内実を明確に提示したところにある。より具体的には以下の点が評価できる。

- 1) フンボルト陶冶論が、出発点であるライプニッツ＝ヴォルフ学派の「力の形而上学」と能力心理学に基づく前成說的決定論、および有用性を幸福とする啓蒙主義の思想圏域から、様々な経験や研究（ベルリン・サロン、ゲッティンゲン大学での古代研究、イェナでのシラーとの交流や自然科学的研究、パリでのフランス知識人との交流やバスク調査旅行、そしてローマ滞在などの経験）を経て、最終的には、「人間性（フマニテート）」の多様な発現や個性形成、美と崇高、感性的なものと愛、古代の価値を承認する新人文主義的（とのちに形容される）陶冶論へと発展して行ったこと、特にその際、性の自然哲学的考察、すなわち、自然や人間を貫く「根本力」の現れである男性的なものや女性的なものとの結合（愛）によって「新たなもの」（個性）が産出されるとの発想が、陶冶論の後成說的展開を可能にしていることが解明された。
- 2) 初期から中期にかけて、一種の自己啓蒙としての陶冶に関心があったフンボルトが、以上の経緯を経て、「他者の自己陶冶」へとその関心を移して行ったことが示され、教育改革を支えた「フンボルト陶冶論」の誕生が具体的に考察された。
- 3) 「人間性」の発現たる「他なるもの」と（学問的に学習的に）取り組むことで、人は、それぞれの仕方（＝個性的に）自己陶冶していくが、そのプロセスを支配する原理が、これまで注目されてこなかった美学草稿を考察することで、構想力（Einbildungskraft）による「象徴」の創造と、その「象徴」を介して行われる「他なるものの類似化」であることが示された。もちろん、「類似化」といっても完全な一致はあり得ないし、終わりのない営みである。しかし、自己の中で「他なるもの」へ向けて像を形成すること自体が、個性形成的であることをフンボルト陶冶論は示している点を明確にした。
- 4) 「他なるもの」の中で特に重視されるのが「古代ギリシア文化」である。その理由は先行研究によって明らかになってはいるのだが、筆者は二点ほど新たな指摘を付け加えている。古代ギリシア語がもつ形式陶冶力の観点からだけでなく、実質的な古代ギリシア文化にこそ陶冶価値を見ていたという点。それは、フンボルトにとって古代ギリシア文化が「人間性の象徴」だったからである。二点目は、陶冶理想として規範性をもって示される古代ギリシア像は、実証研究を基礎にしてはいるものの、それに還元できるものではなく、また、盲目的崇拜の結果でもなかったことが示された。近代化へもがいていた当時のプロイセンにおいて、「人間性を備えた国民」を形成するための「教養の不可避的錯覚」によるもの、すなわち、様々な意味で分断されていた当時のドイツの状況から見た場合、そのように

見えざるを得ないという歴史の遠近法に自覚的だった点が示された。

- 5) 最後に、フンボルトは、人間や自然に関する経験研究と目的論的研究としての人間学・陶冶論を区別していたこと、これは後期の歴史研究と歴史叙述の区別に見られるように、両者は連続的に接続しえないこと、前者を前提としながらも、構想力によって規範性をもつ陶冶理想を像＝範例を提示し、そのことで人間性（フマニテート）の内実を実質的に埋めていく営みが、陶冶論の課題であるとフンボルトが考えていたことが示された。

上記のように、フンボルトの陶冶論の内実と特徴がかなり明確に示された点は高く評価できる。しかし、公開審査会で以下の課題も指摘された。

- 1) フンボルト陶冶論の生成と展開を考察の主軸にしているため、プロイセン教育改革がその一部であったプロイセン改革全体の政治思想との関係が見えにくくなっている。『国家限界論』に見られるように、政治思想と陶冶思想は深く関係している。どんな政治思想（特にイギリス）をどこでどのように受容したのか。例えば、ゲッティンゲン大学法学部で学んだ理論は何だったのか。これはフンボルト陶冶論がどのような政治思想と親和的であるのかという問題に関係する。一般にフンボルトの政治思想はイギリスの立憲君主制をモデルとする自由主義的傾向の強いものだったとされるが、その詳細に関しては、イギリスと君主を同じにするハノーファー王国のゲッティンゲン大学の状況も含め、今後の課題としたいとの応答がなされた。
- 2) フンボルト陶冶論を基礎づけるものとして性の自然哲学があり、男と女の愛による「新しいもの」の産出という思想が、彼の後成説的陶冶論を規定したと指摘、さらには、心身いずれにも還元できない「力」としての「人間」、ないしは全体としての「人間」を考察する比較人間学が、陶冶論の基礎にあるとされている。しかし、18世紀の様々な人間学の展開の中で、このフンボルト人間学がどのような位置を占めていたのか。啓蒙主義期の自然学・人間学は、博物学から近代科学への移行期にあるとされるが、フンボルトのそれはどう位置づくのか。17世紀の機械論的自然研究や神学を前提とした思考から、人間を主題とする人間学への移行を駆動せしめた有機体論的思考（時間と歴史の導入による発達論的考察）とどのような関係にあるのかが明確でない。これに対し、確かにヘルダーの有機体論的思想の影響はあるが、具体的に名が挙げられていないことから、その影響を検証するのが難しいこと、したがって、まずは内在的にフンボルトを解釈しようとしたため、なるべく「機械論的 v.s. 有機体論的」という図式を用いたくなかったとの回答があった。また、自然哲学に関して、同時代の哲学者シェリングと親近性をもっているようだが影響関係はどの質問に対し、共通する部分は大きく、思想史的文脈の中にフンボルトの自然哲学や人間学を位置づける研究は今後の課題であるとの回答がなされた。
- 3) フンボルトは、人間性（フマニテート）を主題とする陶冶論が規範性を帯びた「目的論的学問」であると言われる。その一方で経験的研究、実証的研究を重視するフンボルトがいるとも言われる。「目的論的学問」と実証的事実研究のあいだの関係はどう考えられていたのか。美学草稿の検討から、構想力による「（人間性の）象徴」ないしは「像」の形成にその役割が期待されているとされるものの、より具体的に、事実性と規範性、存在と当為、現実と理想のあいだを埋める作業はどこでなされるのか。後期思想でも（第六章）、実証的歴史研究と歴史叙述の関係で再びこの問題が浮上しているようである。

- 陶冶論の現住所（アドレス）はどこなのか。また、これに関連し、フンボルトへのカントの影響が、『純粹理性批判』の構想力論と『判断力批判』の構想力論のどちらが大きかったのかという質問も出された。これに対し、フンボルトは事実研究（フィールドワーク）と純粹理念的研究（数学や形而上学）のあいだに「目的論的学問」を置き、具体的には美学や実践哲学などをイメージしていたこと、陶冶論は、ある人間の事実性にに基づきながら、理念に照らしその人物の「ありうべき像」を示すことを課題にするが、最終的にそれは、構想力＝象徴化を通して「期待しうる像」として主観的に直観しうるだけであること、したがって客観的にそれを提示できないと考えていたこと、この二つが示された。すなわち、カントの影響問題に関連させると、『判断力批判』の構想力論の影響の方が大きい。また、これに関連し、シェリング「思弁哲学」の「天才的直観」と親和性が高いのではないかという質問に関しては、確かにシェリング哲学に親しみは感じていたようではあるが、フンボルトはカントやシェリングと異なり、徹底したフィールドワーカーだったことも指摘された。フンボルトは二つの側面（事実と理念の二側面）から考察する「ヤヌスの顔」をもっており、明確に答えられない部分があると答えられた。さらに、この問題は、フンボルトの自然哲学を基礎とする陶冶論が「人間の自由」をどのように考えていたのかという問題とも関係するが、これについても今後の課題としたいとされた。
- 4) この研究は方法論としてフンボルト陶冶論の「再構成」が採用されているが、何のための「再構成」なのか。教育思想史研究としての意義は認められるが、アクチュアルな教育学研究としてのインプリケーションは何か。これに関しては、確かに思想史研究で止まっているものの、あえて今日の問題に関連させていうと、古典を研究する人文学の人間形成論的意義に関する議論に一定程度寄与できると考えていること、教育学研究で現在なされている質的な人間形成研究が暗に想定している人間形成観（認識の変容を人間形成と考える人間形成観）に対し、古典を媒体になされる構想力による個性形成の意義を主張できる点に意義があると答えられた。

IV 審査結果

上記のようにいくつか課題を残してはいるものの、この論文の課程博士論文としての価値を損ねるものではない。それは高度な水準に達しているからこそ出てくる今後の研究への期待という性格のものである。したがって、審査員一同は、本論文が十分に博士号（教育学）に値するものと判断する。